

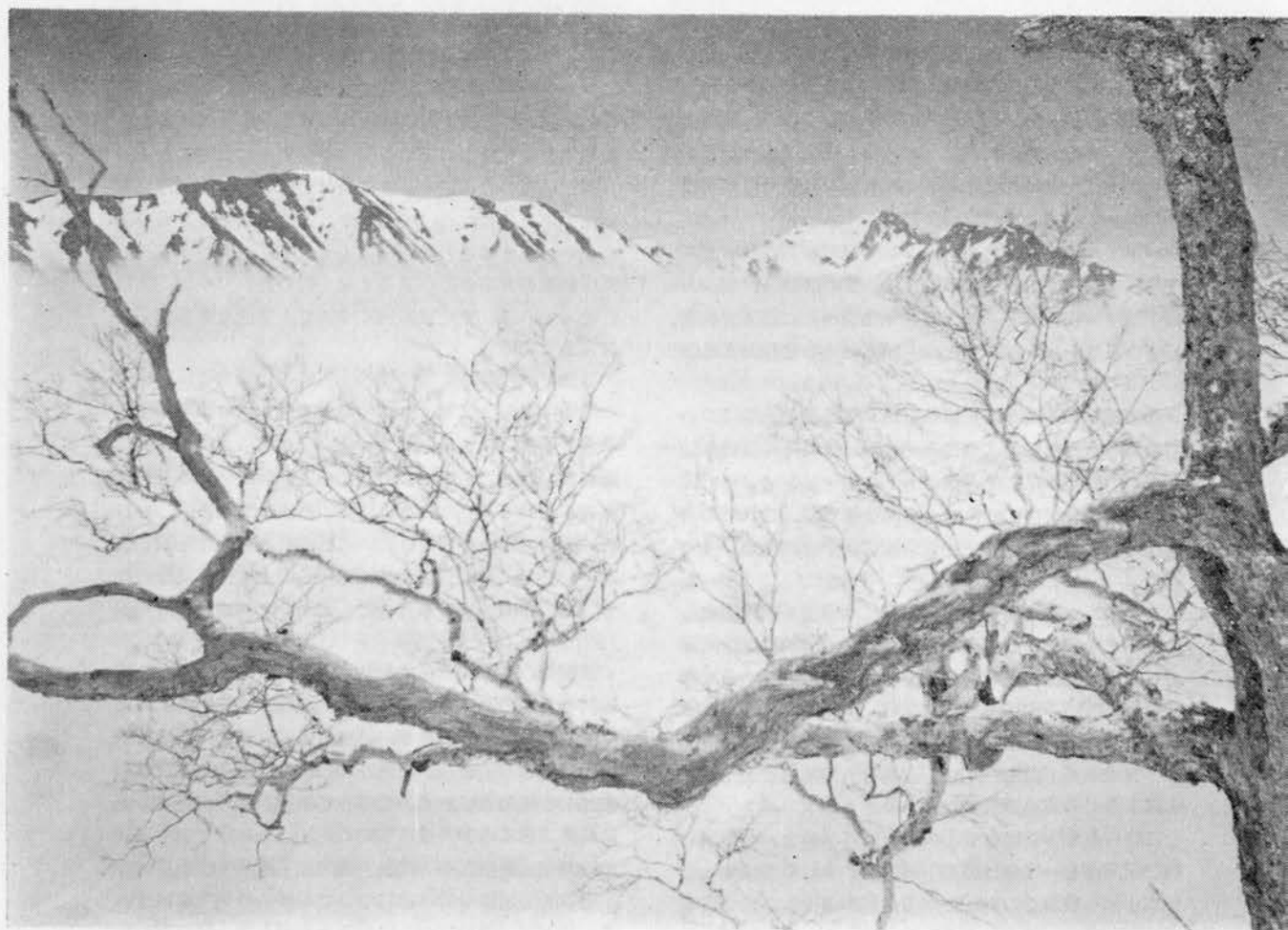
毎月1回25日発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ①

山と博物館

第 7 卷 第 5 号

1962年5月25日



爺ガ岳より針ノ木岳を望む

撮影 高橋秀男

大町山岳博物館

高山植物栽培の歴史

平 林 国 男

野生植物の一つとしての高山植物の栽培は主として園芸植物としての価値の面から出発し、その歴史は他の野生植物の栽培の歴史から較べると非常に新しいものである。

高山植物についての関心は一部の種類について薬草の面からもたれていたようであるが、容易に近づくことができなかつた高山に生育していた植物であるだけに、また特殊な環境に育つ植物であつて移植して栽培するなどということは研究と経験が積まれないうちは不可能であつたので人間の生活とは縁遠い存在であつた。

人と高山植物との本格的な接触は学問的要求からとしての植物分類学や分布学の面から出発している。研究は1700年頃から始められ、フランスのトルネフォールがアララット山(5036m)に登り、山地の植物分布の状態を研究している。また1787年にはスイスのデ・ソーシユールがアルプス山脈のモンブラン(4810m)に登り高山の各面からの研究を進めている。このほかフンボルトはアンデス山脈のチンボラソー(5582m)に登り研究しているなど、つぎつぎと高山植物を求めて登山する学者がでてきている。

高山植物の研究が進むにしたがつて、その栽培についての関心も持たれたようであつたが、まだその技術は幼稚なものであつた。その後コルボンやロビンソンなどは高山植物の栽培法についての書物を著し、これらの著書はわが国の植物研究者や栽培家に大きな影響を与えている。

わが国では薬用植物を対象とした本草学が植物研究のはじめとなっている。これらは特に高山植物だけを対象とした研究とはいへないが、後の研究者にいろいろな影響を与えている点は見逃がせない。本草学者には書物を著した者もあり、小野蘭山が「本草綱目啓蒙」水谷豊文は「物品識名」山本仁羊は「百品考」飯沼慾齋が「草木図説」などの本草書を著している。

これら本草学者につづく後の時代になると、わが国の植物研究はもっぱら外国の学者にまかされた形になってしまった。数多くの外国の学者が日本へ押しかけて日本の植物を調べ、標本などを持去っている。1784年にスエーデンのトゥーンベリによって「日本植物誌」が書かれオランダのブルーメ、シーボルト、ミルケ。あるいはソヴェトのマキシモヴィチ、アメリカのグレーなども日本の植物を研究した学者として知られている。

明治以後になるとわが国からも近代的な研究を進める学者があらわれてくる。矢田部良吉、松村任三、三好学、牧野富太郎、早田文蔵、小泉源一、中野猛之進など多く

の学者によって植物の研究が進められた。また、ゴーランド、ダイバースなどの外人登山者があいついでわが国の高山に訪れ、近代登山の糸口をひもとくことによつてわが国に山岳や登山の知識が普及した。そして植物の研究者も高山植物を求めて探険登山をするようになり、高山植物の研究が深められていった。

このような研究が進むにしたがつて、園芸の面から高山植物の栽培についての関心ももたれるようになり、1895年(明治28年)前後から栽培についての試みがなされるようになった。当時わが国では文明開化の声と一緒にヨーロッパから輸入された西洋草花が流行していたがこの反動としてわが国の伝統的な草花や盆栽などに合った植物を広く野山に求める傾向が強まったといわれる。

西洋草花のきらびやかさに較べて日本的な情緒に富む植物が求められたわけであるが、盆栽的な気風をもつ高山植物の良さがこの要求とよくマッチしたのであろう。高山植物の栽培がはじまると驚く程の勢いで全国的流行になっている。また栽培法についても急速な進歩を見せたようである。

栽培が試みられた当初は高山植物の生態などについての知識は殆んどなく、特殊な環境で育つ高山植物の特性を深く研究したものも無かつたので栽培法も浅い知識で幼稚な方法がとられていた。このため高山植物の栽培は困難なものであるとみなされていたようである。しかしその後栽培法の研究もしいに積み重ねられた失敗や成功の経験と、高山自然状態における高山植物生態などについての学問的研究が進むにしたがつて栽培の可能性が見出された。

城数馬、木下友三、五百城文哉などの愛好家によつて1902年(明治35年)5月に山草会が開かれている。東京で催された展示会であり、いづれも盆栽風な鉢栽培を中心としたものである。陳列された鉢数は約140鉢、種類数は120種余りであり、このうち90種類余りは花をつけた植物であると報告されている。

1903年(明治36年)に前田曙山が「園芸文庫」12巻を出版し高山植物の栽培法についても多くの頁をさいている。1904年(明治37年)になると丸岡九華、前田曙山などが野草会を組織して同年7月第1回の展示会を催している。この時は高山植物200種以上が展示されたといひ第2回の展示会は同年の10月に開催されている。

このようにわが国においての高山植物の栽培は野草愛好家によつて始められたものであり、高山植物だけでは限らず広く一般の野草のうち観賞価値のある種類が園芸的に栽培されていた。1904年(明治37年)からは山野草

栽培家の機関雑誌「園芸界」が発行され、栽培技術向上の上に大きな貢献をしている。

その後高山植物の展示会は年々つづいて開催されるようになり、1908年(明治41年)の山草会陳列目録には137種の植物が記録されている。

これらの種類の中には高山植物ばかりでなく深山性の植物も含まれているが大部分は高山植物である。このようにすべての種類にわたって栽培が試みられたようであり、栽培が非常にむづかしいと伝えられている種類を除いて一通りのものは良い成績をおさめていたようである。

このように鉢栽培による高山植物の栽培は年を追って盛んとなり、栽培技術も進んだ。1909年(明治42年)志村寛は「高山植物採集及培養法」を著し、高山植物の栽培法について鉢によって栽培する盆栽法と高山園(ロックガーデン)に移植する二つの栽培法について述べている。

1917年(大正6年)には河野齡蔵が「高山植物の研究」を著している。ここでは高山植物の特性を述べるとともにその生態や形態の特性を高山の土地気象など環境の面から論じている。栽培については高山植物園での栽培に力点を置き高山植物の各種類を生育地の環境からみた生態区分としての、乾生植物、陽生植物、隠生植物、湿生植物の四つに分類し、それぞれの区分に含まれる個々の種類78種類について特性と栽培上の留意点など述べている。

鉢植えによる栽培法が研究される一方、ロックガーデンなど地植えによる栽培法の研究も進み、しだいに大規模なロックガーデンが設けられるようになった。

札幌の北海道大学農学部付属植物園は1885年(明治18年)に開設されたものであるが、この植物園内にも大きなロックガーデンが造られ、主として北海道の山岳に生育する高山植物が栽培された。1902年(明治35年)日光には東京大学理学部付属植物園の日光分園が開設されたもっぱら高山植物などの高地の植物を中心に栽培するものであり、当初からロックガーデンが設けられている。1920年(大正9年)秋田県に駒ヶ岳高山植物園がつくられている。これは駒ヶ岳とその周辺の高山植物を集めて栽培を始めている。

大正時代に入ると自然にたいする保護思想が大きく盛り上がり、特に自然物の中でも辛うじて今日まで残存している国や地方の自然界を記念するような文化財的価値のある自然物を天然記念物として保護する思潮が高まった。1919年(大正8年)「史蹟名勝天然記念物保存法」が発行され、植物関係の天然記念物では学術上貴重でありわが国の自然を記念するようなものが保護対象として選ばれるようになった。高山植物もこれらの保護対象として取上げられ、代表的な高山植物帯などは天然記念物に指定されている。

また1931年(昭和6年)「国立公園法」が発布され、法によって指定された国立公園では高山植物の採取について禁止や制限が加えられ、この面からも保護されることになった。

こうして、一時採集マニヤや薬種業者、園芸業者など営利のために多量に採取されていた高山植物も採集が困難となり、保護されることになった。しかし高山植物の栽培については当時経験や知識が幾分増えた程度の段階であり、まだ確実な方法や栽培の基本的な問題が解決されない状態であった。この研究初期の段階で一般の愛好家からは縁遠い存在となり、それ以後はもっぱら大学や植物園などの公共施設によってぼつぼつ栽培研究が進められるようになった。

1929年(昭和4年)には八甲田山に東北大学八甲田植物実験所付属高山植物園が開設され、八甲田山を中心とし、その他の高山植物がロックガーデンに集められた。1934年(昭和9年)には、神戸の六甲山に六甲高山植物園が開かれ、六甲山や他の山岳の高山植物が公開されている。

第二次世界大戦に入って、戦前流行した登山熱もほとんど下火になり、高山植物についての関心も低調となった。終戦後社会が落着きをとりもどすとともに残された美しいわが国の自然をあらためて見なおし、これを保存して国民の社会教育や観光、レクリエーションの場として、また国際観光の面でも活用して行こうという動きがでてきた。自然に親しむという形で登山熱が再び燃え上り、山岳を対象とした各地の観光地はブームといわれる程の盛況を呈すようになった。

自然保護文化財保護の関心も深まり「史蹟名勝天然記念物保存法」は1950年(昭和25年)から発効した「文化財保護法」に含まれ、「国立公園法」は1957年(昭和32年)「自然公園法」に改装された。

各地の植物園では戦争中荒れるにまかせていた高山植物園の整備をはじめ、主として学校教育や社会教育など教育的利用と学術研究上の資料として活用する見地から高山植物の新しいものを導入し、栽培と取組むようになった。また、ヒマラヤなど諸外国の山岳に生育する高山植物なども加えて栽培する植物園もでてきた。しかし栽培法は明治末から大正のはじめにかけて研究された方法を踏襲しているだけであってたいした進歩が見られない。したがってその栽培法はある植物園で成功した例を他の場所で応用しても必ずしも良い結果は得られず、また、この逆の場合も非常に多い。このことは栽培し易い種類の場合にもいえるが、特に栽培のむづかしい種類についていえる。このように現在までのところ高山植物の栽培法については基本的な問題が未解定の状態であり、すべての問題が研究段階にあるといってもよからう。

(山博学芸員)

「日本アルプスの父」

ウェストン氏をしのぶ

……著書・書翰・名刺から

高橋秀男

ウェストン氏のこと

6月初旬、恒例のウェストン祭が上高地を中心に開かれる。

ウェストン氏は日本を第二の故里とした、日本アルプスの探検者であり、パイオニアである。日本アルプスに深い愛情を寄せ、その著書「日本アルプス……登山と探検」によって日本アルプスを世界に紹介したが、反面日本人に日本アルプスを再認識させた意義も大きい。紀行文の総ては日本アルプスらしい明期の山村の生活や風習を知る上に欠くことのできない資料となっている。こん日じつに「日本アルプスの父」として祭られている所以であろう。

訳者である岡村精一氏の言葉を借りて、ウェストン氏と日本との関係を見ることにしたい。

「ウォルター・ウェストンは1861年12月25日にダービーの近くでジョン・ウェストンの六男として生まれた。ケムブリジのクレリア・コリジで教育を受け、1887年にm・aとなった。翌1888年(明治21年)から1895年(明治28年)まで英国宣教師として来日、神戸に滞在していた。滞在中は地理学者、民俗学者としての探求心から各地を旅行し、日本アルプスまで歩を伸ばしたのである。そして帰国後、1896年に「日本アルプス登山と探検」をロンドンで出版した。

1897年から1902年までは、ウィンプルドンで聖職についていたが、再び1902年(明治35年)から1906年(明治39年)までS・P・gの使節として横浜に滞在した。

1906年から1911年まで、一旦故国の人となったが、さらに1911年(明治44年)から1915年(大正4年)までは英国宣教師として横浜に第三回目の日本滞留をしていた

その後1918年に著書「極東の遊歩場」、1925年に「見なれぬ日本を旅して」さらに1926年には「日本」をロンドンで次々に出版された。ウェストンは1916年以後故国イギリスで健康な生治を続け、たえず日本と日本アルプスを愛していた。日本はたしかに氏にとって第二の故国であり、日本アルプスは永久に忘れることのできない思い出であった。

日本山岳会創設の勸説者であり、またその名誉会員でもあった。

しかし、晩年はいさゝか健康を害し、スイス等に行き静養したこともあった。そして遂に1940年この世を去

た。」(原文のまま)

今、多年日本アルプスに貢献された氏の恩かけを偲んで、氏の最も好きだった上高地の自然石にレリーフが彫られており、毎年6月にウェストン氏を偲ぶ祭が開かれている。

しかし、現在日本に残されている氏にゆかりの深い資料はまことに数少なく、ここに紹介する肉筆書翰、名刺は貴重な資料の一つである。

肉筆書翰

この書翰は昭和26年6月山県五十雄氏(東京都渋谷区代々木西原町896)が信州に山岳博物館ができることを聞き、展示資料にされるようにと寄贈されたものである。山県氏の手に入ったいきさつを手紙(昭和26年6月29日付)から紹介しよう。

「50余年前、多分私がまだ東京大学に学んでいた頃と存じましたが友人小島烏水氏よりウェストン氏が日本アルプス開拓者であることを聞き、当時の地学雑誌に掲載の日本アルプスについての一論文を英訳して、同氏へ送りました。同氏に面会したことはありませんでしたが、或は小島氏の依頼に応じて右論文を英訳しこれを送ったのかも知れません。遠い前のことですからはっきり覚えておりません。実際全く忘れていましたところ十数年前小島氏に「文庫」の誌友懇談会において面会の節、ウェストン氏のことが話題に上り、同氏が私の好意をお喜になり、礼状とともに万年筆を私へ送られたとお話になりましたのを憶い出し、探して見ましたところその礼状が見つかりました。これがここに御寄贈上げます書翰でございます。横浜山手212の御宅にて認められ、日付は3月21日ですが、残念なことは年が書いてありません。大意により、英国へ御帰りになる直前に書かれたものと察せられます。此事は小島氏の著書のどれかに記述されてあるそうです」と書翰について説明し、最後に小島氏やウェストン氏の著書、肉筆等を集められ、山岳博物館に展示されるようつけ加えている。

拝啓、地理学雑誌の記事御翻譯下され、まことにありがたく深くお礼申し上げます。御書翰並びに原稿料拝受、早速御返事申上げるべきところ、遅れましてすみません。御書面並びに御原稿は貴方への御親切、御努力に対する思い出とともに、郷里に持ち帰るつもりであります。なお将来親しく御面接の機を得たいものと存じます。御礼

I shall carry back with them
 both my country a lively
 sense of your courtesy and
 valuable help. I hope that
 at some future time I may
 have the pleasure of making
 your acquaintance in person
 as I see an opportunity
 of a small museum from
 some of your kindness with
 which you will have
 Such an attention in rendering
 the of hand of English.

212 Bluff

Yokohama

March 21

My Dear Sir
 Allow me to thank
 you very warmly for your
 kindness in translating for me
 the article in the zoological
 magazine. Please pardon
 my delay in acknowledging
 receipt of your kind letter
 and M.S.S.

名刺

この名刺は未曾生物研究所の
 横内齊氏の御好意で、持のち主
 の東筑摩郡四賀村刈谷原中沢す
 みさんからお借りして博物館で
 展示されたものである。名刺の
 大きさは縦4.2cm, 横8.2cm,
 表には Rev. W. Weston

裏には「明治26年8月21日松
 本町、笹井源三郎方に於て交換
 」と墨書きしてある。

名刺を交換した当時の様子を
 ウェストンの著書から調べて見
 ることにしよう。

1893年(明治26年)8月には
 平湯—安房峠—松峠—穂場—松
 本—橋場—徳本峠—穂高岳—橋
 場—松本—上田へのコースを辿

into Japanese may find the
 little article useful in the
 course of your valuable work.
 with renewed thanks &
 kind regards I am
 Yours very truly
 Walter Weston

のしる
 しとし
 て粗品
 をお送
 りいた
 しまし
 たから
 御笑納
 下さい
 むづか
 しい英
 語の翻
 訳に健
 筆であ
 られる
 貴方の
 貴重な
 仕事の
 上に何

っている。「穂高山の探検に出かける前に私は松本平原
 へ行って『信濃屋』のいつも親切な若い主人笹井元治の
 家へ私宛に来ていた手紙や食料を、取りに行った。」

名刺裏の笹井源三郎氏(弘化元年7月生)は笹井家の
 主人で元治氏(元治元年10月生)は長男であり、若主人
 として信濃屋をきりまわしていたのであろう。

ウェストンの名刺は持ち主である前記すみさんの父、
 中沢弥惣右衛門氏が東筑摩郡役所の書記をしていた当時
 上司の命によってウェストン氏を上高地へ案内した時に
 交換したものである。

ウェストンが宿で穂高山への探検の計画を笹井元治氏
 に話すとともに同行することに決まったそうであるが、
 翌朝不幸ができて行けなくなった。あるいは笹井元治氏
 の代りに中沢氏が同行したものか。著書によると中沢氏
 は徳本小屋までは同行しているようであるが、その後の
 様子は文章に全々登場していない。そこでウェストン氏
 の行程を著書から見ると、木曜日(8月24日)の朝、私
 と私の雇った2人の猟師(嘉門次とその仲間)は徳本峠
 を越え、目指す山の麓に通じている道を進んでいた。そ
 の夜は梓川左岸の、すでになじみの、崩れそうな小屋へ
 泊った。翌日穂高山の頂上を踏み、下山途上のできごと
 である。嘉門次が地蜂の巣を踏んでしまったのだ。蜂は
 怒ってぶんぶんとび上った。嘉門次の着物はきっちりし
 ているので蜂には刺されなかったが、ウェストンは半ズ
 ボンに大きな裂け目がある上、首や腕が露出していたの
 で2、3分の後には一ダースも刺された。

その日徳本の小屋へ泊った。夜、蜂に刺された部分が
 痛み、色々の療法が話題になった。「この傷の療法をよ

らかのお役に立てば幸と幸いです。

先はお礼まで

敬具

3月21日

横浜市山手 212番地

ウォルター・ウェストン

ウェストン氏は故国のアルパインクラブの機関誌や地
 理学協会の雑誌に日本アルプスに関する資料を集めてい
 たものと思われる。

Rev. W. Weston.

ENGLISH CHAPLAIN.

14. Nakayamatodori Sancho

名刺の表

は
六月八日
山岳博物館
山本 三郎
様
宛
手紙
です
ご
覧
下
さい

く心得ている一人の日本人が私の一行のいた中もの彼はレマス伯父さんの「ブレア、ラビット」のように、その時は『じっと寝ていた何も云わなかった』、晩になってから私が室の真中の火の側に立って、二つ三つぬれた着物を乾していると、今い

名刺の裏

男が、そっと近づいて来て、『蜂に刺された跡を見せて下さいませんか』と云い出した。私は傷を見せながら、知らん顔をして相変すぬれた着物を乾かしていた。終りにふと私はふり向いた。すると驚いたことに彼は私の後で床に蹴り傷の上に幾度も催眠術の按摩のような恰好をしたし、指を様々に曲げているのを見た。これがすむと彼は立上り小屋の開いた戸口へ行って、輝く東洋的な月光の下に、いま雄大に物凄く、ほの見える穂高山の崇峻な絶壁に向って、恭しく顔を向けた。そして彼はかしわ手を打って、手助けに来て下さいと山の霊を呼び出し、祈りの姿勢をして頭を下げた。祈禱が終ると彼は再びかしわ手を打った。そして私の立っている処へ静かに戻って来た。彼は荘重なこの世ならぬ声を出して『これはマジナイいとうものです。朝になれば貴方はすっかりよく

なりますよ』といった。……中略……中沢の言った効果は、なかったということをつけ加えるに留めておこう(岡村精一訳、ウェストン著日本アルプス登山と探検より)

マジナイをする「中沢という男」が中沢弥惣右衛門氏であろう。蜂に刺された翌日が、ちょうど名刺を交換した日すなわち8月26日に当る。名刺裏の日付が正しいとすれば徳本の小屋で交換したことになり「笹井源三郎宅は書き間違

えたらうか。逆に交換場所が正しいとすれば後で記すときに日付を間違えたものではないかと想像される。

ウェストンが日本人を観察したほんの一端であるが、著書一杯、あふれるばかりに、今は減び去ったと思われるような山村の風習、信仰を、今日まで伝え残しておいてくれたことは誠に興味深いことである。

(山博学芸員)

—第6回 山の自然科学教室計画書—

毎年都内の中学生を迎えて行なわれる「山の自然科学教室」が今年も1月23日から28日にかけて開催されることになりました。計画の概要は下記のとおりです。

主催長野県大町市教育委員会。後援東京都教育委員会。実施機関大町山岳博物館・東京教育大学野外研究同好会。目的北アルプス白馬連峰八方山・八方池及び中綱湖・居谷里湿原における自然科学的観察ならびに正しい登山についての指導。募集人員都内中学生180名(1校5名以上45名以下) 期日昭和37年7月23日～7月28日(5泊6日) 日程第一日(7月23日) 一新宿発=汽車=信濃大町=バス=大町市民会館(開講式) 一徒歩=市内名旅館(泊) 第二日(7月24日) 大町一徒歩=動物園・山岳博物館(見学)=バス=居谷里湿原(観察・昼食) 一徒歩=稲尾=バス=中綱湖=バス=細野(泊) 第三日(7月25日) 細野一徒歩(登山・観察) 一黒菱ヒュッテ(泊) 第四日(7月26日) 黒菱ヒュッテ(登山・観察) 八方山・八方池=黒菱ヒュッテ(泊) 第五日(7月27日) 黒菱ヒュッテ=ケーブル=細野一徒歩=信濃四ツ谷=夜行列車=。第六日(7月28日) 朝、新宿着。解散。指導東京教育大学教授印東玄高先生、信州大学助教授田中邦雄先生、山岳博物館学芸員、調査員12名、東京教育大学自然科学専攻学生30名余。その他医師、看護婦名1名が付添う。

動物園日記

— ク マ —

動物園の前で一番見物人の多いところはクマとサルの前である。

「クロ、クロ」と呼ぶと30貫の巨体でソソソと「何んの用事が知らん」と云ったようすの顔付で覗きこんで来る。「ホイ ビーナツ」と投げ入れる仕草をすると、早速前足を籠の鉄棒にかけてアーンと大口をあけて待っている。

このクロ公が動物園に越して来たのは昭和25年穂高町有明のある農家で飼育していたのをゆずってもらった訳で、その当時は家族と一緒に遊んだり、食べたり、こちらから引き取りに行った、奥原一登氏等が農家に到着するや、戸口からヒョコヒョコと現われ、自転車の上にチョコンと乗ったほどのチャメ公で、まだ可愛い仔グマであった。



「このクマ冬眠しないね」と良く云われるが動物園きつての朝ねぼうである。

餌料はリンゴ600g、オカラ500g、ユスカ300g、サツマイモ400g、煮干、コロイカル、塩、若干を1日2回与えている。

(千葉彬司)

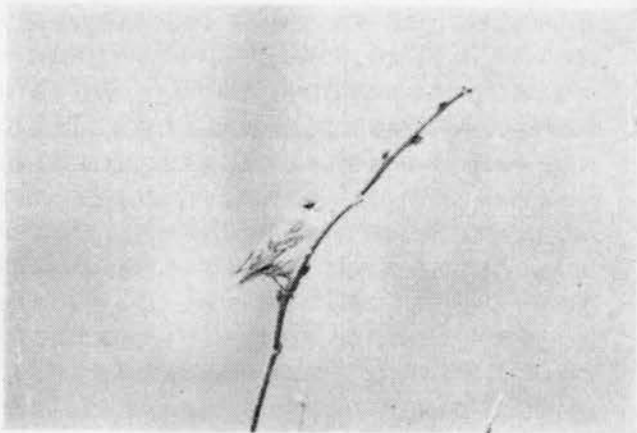
ノ ジ コ

長 沢 修 介

5月2日、晴、桜花爛漫も過ぎ花びらが一ひら一ひら風によって散って行き山々も次第に黄緑の色を増して行く。

田圃仕事の合間にふらりと田の畔を歩いてみるさかんに上下するヒバリはもう営巣を始めたようだ。巣には抱卵のメスがいるのか、それともかえったばかりのヒナだろうか？田圃の中はまだレンゲの花がぼつぼつ咲き始めた所だ。そんなレンゲのひとつきわ繁った中から1羽のノジコが飛び出し

畔の桑の木に止って小さな声で嘖り始める。雑木林の中で聞くあの大声な美声とは違って何と可愛らしい歌だろう。ここは自分の棲むテリトリーではないので少々遠慮しているのかな。でも節廻しだけは間違いなくチョチョピピ ツツウーリリ……と鳴いているが何か違う鳥の様な感じだ。漂鳥のこの鳥は暖地から蕃殖地への雑木林へ行く途中よくこんな姿が見られる。他の鳥のように目でそれとわかる様に渡って歩かず、いつもひつそりとやって来る。当地方の雑木林などにはごく普通に見られその美声は鈴を振るようで森林の歌手の一人でもあるこのノジコもあと少ししたら山林の中に自分のテリトリーを守って今習っている歌をもっと胸を張って大声で歌うようになるだろう。その頃には木々もすっかり緑にな



って新緑の香りでいっぱいになり彼女等の棲家の囲りも他の鳥達の歌声で周日にきわうだろう。

資 料 寄 贈

オシドリ 1 体 大町市白塩町金原通 信濃日報
(新聞明治29年発行) 6 部 大町市神楽町森啓治
糸車 1 台 大町市八日町保科岩雄 リス(幼体) 3
体 北安八坂村藤尾宮田芳房 オシドリ 1 体 大町
市常盤清水菅沢宗人 かぎつけ 1 個 大町市八日町
保科岩雄 荷車 1 台 大町市大黒町高橋長治 ノウ
サギ 1 体 大町市相生町柿崎丑重 ダイシャクシギ
1 体 北安八坂村神城佐野長沢勲 北安八坂村北城
幸田太田徳明 ノウサギ 1 体 宮田寿男(敬称略)

博物館だより

春の特別写真展は4月28日～5月6日の9日間開催され好評裏に幕をとじた。

ゴミ箱をすえつけ 博物館庭を清潔に保って下さいと大町第二中、岡村隆、山本孝夫、大八木康久、長沢康の4君が4個のゴミ箱を博物館に寄贈

海ノ口子供会の小鳥の巣箱かけが5月15日行なわれ、公民館その他2カ所に小鳥の巣箱20数個がとりつけられた。

大町営林署主催の植樹祭が5月8日鹿島地区で行なわれ、山岳博物館も参加して盛大に行なわれた。

37年度山博協議会委員

(順不動 敬称略)

大倉 一 雄 常盤小学校長 大町五日町
平林 武夫 第二中学校長 北安松川村

武田 武	大町山の会	大町北原町
高橋 銚吾	大町山岳会	大町仁科町
平林 はるゑ	市連合婦人会	大町仁科町
丸山 雅弘	市連合青年団	常盤 須沼
田中 保平	山博友の会	大町依町
西尾 弥太郎	大町営林署長	大町大黒町
古原 和美	大町保健所長	大町仁科町
阿部 酉与	国鉄大町駅	大町中原町
石原 守明	昭電大町工場	大町第一社宅
内山 慎三	観光協会理事	大町仁科町
山本 携拳	大町スキークラブ	大町八日町
田中 操	市公民館長	大町相生町
伝刀 成茂	市会議員	平区 源波
曾根原 義郎	〃	大町大黒町
平林 宗兵衛	〃	大町北原町
広瀬 英吉	〃	大町五日町
成沢 茂三郎	〃	平区 中綱
奥原 一登	〃	大町神栄町

山博と聞けば何か貧乏世帯を思い浮べる様な錯覚をおぼえる。これは私が商人だという潜在性からでなく、おそらく研究員になっている他の人達も又関係ある周囲の方々も大なり小なり感ずる事だと思ふ。今迄にも色々とりざたされたこの山博、換言すれば幾多の波瀾の中にあつて今日やっと生きのびているという感じの山博、いったいこれで良いのだろうか。私も直接学術的な研究にはタッチしなかつたが色々とお世話になったり又お世話をしたりして今日に至っている。その今日迄の間にいつも思うことはもう少しここに金があつたらなァーと思う事でありあらゆる行事や催物のつとめ思い浮ばせられるのもこの事である。山博にいるあの数人の職員達のスーパー的な働きぶりを見、寝食忘れた研究ぶりを見るにつけ一層の思いにふけるのである。金の無いのを彼等が良くカバーして色々工夫して内部の装飾等も立派に自らの手で作り上げている、しかし一旦眼を陳列物からはずし角度を変えれば必ずしも行きとどいた館内とはいえないし、かつての校舎をペンキで包んで見たが天井といい床といいお粗末な次第である。手を加えれば良いのだろうかここまで来るとやはり又先立つものは金であろう。先に日本でもめずらしいといわれ又貴重な雷鳥研究もこの金不足の為に大切な越冬場面のキャッチが出来ずに終つたと聞いたが全く以つて歯ぐきのかゆい心持だつた、それというもこの山博に集う先輩や学生、研究員の人達が労力を奉仕しての熱烈なる意欲にもかかわらず、わずかながらの金が無い為に報われずに葬られてしまう数多くの場面を見るからである。これ以上の費用はかけなくても現在立派に成長し発展していると放言する様なやからが居るとすれば私はあえてその人を郷土の文化と発展を妨げる愚人だとののしりたい、それは今日大町市がアルプスという大資源を開発し観光的な発展を見るあかつきにおいても如何に山博がこれら事業の土台でもあるべき多くの資料を提示し又アドバイスするべき幾多の重大なポイントをにぎっているからである。私は先に黒四ルートの手入初めの頃山博が雪崩や、雨量のデーターをまとめたのを見た。他目には気のつかない地味な仕事、これが彼等の仕事であり内容でもあるがその中に常に鋭い科学のメスが下されている。これ等の事がひいては人命をも守る尊いものになるのだと痛感した、ある時は風雪の中を身体にむちうって足で資料を集め廻る彼等を見る時又さびれ荒れ果た禽獣舎の中でキュークツをしのいでいる動物たちを見る時、一日も早く山博が金という厄介から解放され自由に活動出来る様念じてやまない。

私は思う

(山本携拳)

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料300円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。
大町山岳博物館

山と博物館 第7巻第5号 1962年5月25日発行
発行所 長野県大町市TEL(大町)211
大町山岳博物館
印刷所 大町市上仲町
信州印刷大町工場